

令和3年度

日章学園

鹿児島育英館高等学校

入学試験問題

国語

(時間 45 分)

(注意)

- 1 「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。
- 2 問題は、7ページあります。解答用紙は1枚です。
- 3 「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、中学校名、氏名を記入しなさい。
- 4 答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。
- 5 印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。
- 6 「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具をおき、解答用紙だけを裏返しにして、机の上におきなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ひとが哲学に焦がれるのは、いまのじぶんの道具立てではじぶんがいま直面している問題がうまく解けないときである。なにかこれまでとは違う問い方をしなければ、それももつと包括的な問いのなかに座を移さないと、^A「らちがあかないと感じる」ときである。そのために、哲学の書き物を手引きに、^{*}「レーヴィットもいうように」「すべてのものを取って抑えて質問し、懷疑し、探求」しようとする。けれどもこのような思考には、いってみれば大きな肺活量が必要。じぶんにとってあたりまえのことに疑いを向け、他者の意見によってみずからのそれを揉みながら、ああでもない、こうでもない、あくまで論理的に問いを問いつづけるそのプロセスを歩み抜くには、ちょうど無呼吸のまま潜水をしつづけるときのような肺活量が必要なのである。あるいは、思考のため、[、]「いっていい」。さらにそれは、すぐにはわからないことにわからないままつきあう思考の体力といいかえてもいいし、すぐには解消されない^イ葛藤の前でその葛藤に晒^{さら}されつづける耐性といってもいい。

というのも、個人生活にあっても社会生活にあっても、大事なことほどすぐには答えが出ないからである。いやそもそも答えの出ないことだってある。だから、人生の、あるいは社会の複雑な現実を前にしてわたしたちが紡ぐべき思考というのは、わからないけれどもこれは大事ということを見いだし、そしてそのことに、わからないまま正確に対処することだといってもいい。このことを、三つのまったく異なる場面を例にとって考えてみたい。

1、政治的な思考について、政治的な判断はきわめて流動的で不確定な状況のなかでなされる。外交政策であれば、それぞれを測り、いくつかの可能性を想定して、それぞれに手を打つ。2、そうした対処したいが関係国の思惑を刺激し、事態はいつそう複雑になってくる。国内政策であれば、さしあたって不可欠の政策AとBがあると——たとえば景気刺激と構造改革という、相反する政策——、いずれを先にするかでAとBのそれぞれの政策としての有効性は大きく変じる。政策が置かれる状況じたいが大きく変化してしまうからである。だからAに先に手をつけるのか、Bを先に実行するのか、それを手遅れになることなく決定しなければならない。けれども^①「いづれが有効か、だれも見通せているわけではない」。見通せなければ^Bも決断しなければならぬのだ。3、結果がわからないまま、わからないことに正確に対応するということ、それが政治的思考にはもとめられる。政治的な思考とは、戦略的な駆け引きである以前に、まずは最善の工夫であり、最悪の^ウ「カイ」^ヒであり、優先度の決定（価値の優先／後置の判断）——これを背後から支える《価値の遠近法》が哲学である——なのであって、^②「ひとはそこで、最終的な「正解」が見えないままに、しかも最上の「確かさ」をもとめて考えつづければならないのだ」。次に、^{*}「ケアの思考である」。病院である患者が非常に^エ「シンコクな病に陥ったとき、そしてどういう^オ「チリヨウと看護の方針を

るかというときに、考えは立場によって大きく異なる。医師の立場、看護師の立場、病院のスタッフの立場、患者の家族の立場、そしてなにより患者本人の思いと、さまざまな思いや考えが錯綜する。そのうちだれかの意見をとれば、別のだれかが納得しない。つまりここには正解はない。正解がないままスタッフたちは、猶予もなしにチリヨウと看護の方針を決めなければならぬ。

最後に、アートにおける思考。4、制作中の画家には、じぶんが表現しようとおもっているものがじつは何かよくわからない。描きたい、表現したいという衝動だけは明確にあるが、描きたいそれが何であるかはじぶんでも掴めていない。けれども、ここはこの色でなくてはならない、そこはこういう線でなければいけないという必然性はまぎれもなくある。だから、描きかけの画面のなかのある色を別の色に置き換えたら全体をそっくり描きなおさないといけないことになってしまふ。そしてこれしかありえないという必然性を追うなかで絵はやっと描き終わる。しかしその画業の意味を問われても答えようがない。画家の元永定正はじぶんの作品について「これは何ですか？」と問われるといつも、「これはこれです」と答えるのだという。そういう意味では、曖昧なものを曖昧なままに正確に表現する、一箇所もゆるがせにしないで、正確に、これしかないという表現へともたらずこと、これが画家の力量である。

このように、政治、ケア、描画のいずれにおいてももつとも大事なことは、わからないもの、正解がないものに、わからないまま、正確がないまま、いかに正確に処するかということである。そういう頭の使い方をしなければならぬのがわたしたちのリアルな社会であるのに、多くの人はそれとは反対方向にサットウする。わかりやすい言葉、わかりやすい説明をもとめるのだ。だがほんとうに大事なことは、困難な問題に直面したときに、すぐに結論を出さなくて、問題がじぶんのなかで立体的に見えてくるまでいわば潜水しつづけるということである。知性に肺活量をつけるというのはそういうことである。目の前にある二者択一、あるいは二項対立に晒されつづけること、対立を前にして考え込み、考えに考えてやがてその外へ出ること、それが思考の原型なのに、そうした対立をあらかじめ削除しておく、均しておくというのが、現代、人びとの思考の趨勢であるようにおもえてしかたがない。哲学はこういう趨勢に抗って、知性のそういう肺活量を鍛えるものである。

ひとは、思いどおりにならないもの、理由がわからないものに取り囲まれて、苛立ちや焦り、不満や違和感で息が詰まりそうになると、その鬱ぎを突破するために、じぶんが置かれている状況をわかりやすい論理にくるんでしまおうとする。その論理に立てこもろうとする。わからないものをわからないまま放置していることに耐えられないからだ。5、わかりやすい物語にすぐに飛びつく。

だが、ほんとうに大事なことは、ある事態に直面して、これは絶対手放してはならないものなのか、なくてもよいものなの

か、あるいは絶対にあつてはいけないものなのか、そういうことをきちっと見極めるような視力である。そのためには、たとえば目下のじぶんの関心とはさしあたって接点のないような思考や表現にもふれることが大事だ。じぶんのこれまでの関心はなかった別の補助線を立てることで、より客観的な価値の遠近法をじぶんのなかに組み込むことが大事である。

(驚田清一「哲学の使い方」より)

(注) *1レーヴィット：ドイツの哲学者

2 ケア ……介護・世話をすること

3 趨勢 ……物事の進み向かう様子

問一 傍線部ア～キまでのカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなに直しなさい。

問二 1～5の中に、入る言葉をそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ しかし ウ まず エ だから オ たとえば

問三 傍線部A・Bの意味として適切なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- A らちがあかない 1 深まらない 2 中途半端である 3 はかどらない 4 中に入れない
B 手遅れになる 1 一時的に対応する 2 間に合わない 3 手段が見つからない 4 あきらめる

問四 この文章に見出しをつけた場合、適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 哲学の入り口 イ 政治的な思考 ウ 思考の肺活量 エ 正解に至る方法

問五 傍線部①「いずれ」とは何を指しますか。十字以内で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部②「正解」、③「確かさ」に「」がついているのはなぜですか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「正解」「確かさ」はいくつかあるが、特定できないから

イ 「正解」「確かさ」は他の著作から引用したものであるから

ウ 「正解」「確かさ」を強調するため

エ 「正解」「確かさ」があるのかわからないから

問七 傍線部④「画家の元永定正は……と答える」のはなぜですか。その理由を三十字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑤「こういう趨勢」とはどういうものですか。本文の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。

問九 傍線部⑥「別の補助線を立てること」とはどういうことですか。本文から三十七字で抜き出し、最初と最後の七字を答えなさい。

問十 筆者の主張に合致するものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 哲学はわからない問題にわかりやすい解答を見つけたためのものである。

イ 哲学はじぶんが直面している問題の答えを導く方法として有用である。

ウ 哲学は二者択一・二項対立の問題に向き合わないで、独自に思考するためである。

エ 哲学は困難な問題に結論を出す前に問題の中身が見えるように考え続けるためである。

二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(送り仮名などは本文のとおり表記している)

陽は既に西に遠退とちのいて、西の空を薄桃色に燃え立たせ、眼の前のまばらに立つ住宅は影絵のように黝くろずんで見えていた。道子は光りを求めて進むように、住宅街を突っ切って空の開けた多摩川脇の草原に出た。一面に燃えた雑草の中に立って、思い切り手を振った。

冬の陽はみるみるうちに西に沈んで、桃色の西の端はすれに、藍色の山脈の峰を浮き上らせた。秩父の連山だ！ 道子はこういう夕景色をゆっくり眺めたのは今春女学校を卒業してから一度もなかったような気がした。あわただしい、始終追いつめられて、縮こまった生活ばかりして来たという感じが道子を不満にした。

ほーっと大きな吐息をまたついて、彼女は堤防の方に向って歩き出した。冷たい風が吹き始めた。彼女は勢い足に力を入れて草を踏みにじって進んだ。道子が堤防の上に立ったときは、輝いていた西の空は白く濁って、西の川上から川霧と一緒に夕霧もよぎが迫って来た。東の空には満月に近い月が青白い光りを刻々に増して来て、幅三尺の堤防の上を真白な坦道のように目立たせた。道子は急に総毛立ももたちったので、身体をぶるぶる震わせながら堤防の上を歩き出した。途中、振り返っていると住宅街の窓々には小さく電燈がともって、人の影も定かではなかった。ましてその向うの表通りはただ一列の明りの線となって、川下の橋に連なっている。

誰も見る人がない……よし……思い切り手足を動かしてやろう……道子は心の中で呟いた。膝を高く折り曲げて足踏みをしながら両腕を前後に大きく振った。それから下駄を脱いで駆け出してみた。女学校在学中ランニングの選手だった当時の意気込みが全身に湧き上って来た。道子は着物の裾を端折はしよって堤防の上を駆けた。髪はほどけて肩に振りかかった。

ともすれば堤防の上から足を踏み外しはしないかと思うほどまっしぐらに駆けた。もとの下駄を脱いだところへ駈け戻って来ると、さすがに身体全体に汗が流れ息が切れた。胸の中では心臓が激しく衝ち続けた。その心臓の鼓動と一緒に全身の筋肉がぴくぴくとふるえた。——ほんとうに澆刺と活きている感じがする。女学校にいた頃はこれほど感じなかったのに。毎日窮屈な仕事に圧えつけられて暮している、こんな駈足ぐらいでもこうまで活きている感じが珍らしく感じられるものか。いっそ毎日やったら——

道子は髪を束ねながら急ぎ足で家に帰って来た。彼女はこの計画を家の者に話さなかった。両親はきつと差止めるように思われたし、兄弟は親し過ぎて擲揄うぐらいのものであるうから。いやそれよりも彼女は月明の中に疾駆する興奮した気持ちを自分独りで内密に味わいたかったから。

翌日道子はアンダーシャツにパンツを穿き、その上に着物を着て隠し、汚れ足袋も新聞紙にくるんで家を出ようとした。

「どこへ行くんです、この忙がしいのに。それに夕飯時じゃありませんか」

母親の声は鋭かった。道子はを折られて引返した。夕食を兄弟と一緒に済ました後でも、道子は昨晚の駈足の快感が忘れられなかった。外出する口実はないかと頻りに考えていた。

「ちよつと銭湯に行つて来ます」

道子の思いつきは至極当然のことのように家の者に聞き流された。道子は急いで石鹼と手拭と湯銭を持って表へ出た。彼女は着物の裾を蹴って一散に堤防へ駈けて行った。冷たい風が耳に痛かった。堤防の上で、さつと着物を脱ぐと手拭でうしろ鉢巻をした。凜々しい女流選手の姿だった。足袋を履くのもどかしげに足踏みの稽古から駈足のスタートにかかった。爪先立って身をかめると、冷たいコンクリートの上に手を触れた。オン・ユアー・マーク、ゲットセツ、道子は弾条仕掛のように飛び出した。昨日の如く青白い月光に照らし出された堤防の上を、遙かに下を多摩川が銀色に光って淙々と音を立てて流れている。

次第に脚の疲れを覚えて速力を緩めたとき、道子は月の光りのためか一種悲壮な気分^④に衝たれた——自分はいま澆刺と生きてはいるが、違った世界に生きているという感じがした。人類とは離れた、淋しいがしかも厳肅な世界に生きているという感じだった。

(岡本かの子「快走」より)

三

問一 傍線部①「思い切り手足を動かしてやろう」という思いに至った理由は何ですか。それがわかる一文を本文から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問二 文中の空欄に入る、体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

問三 傍線部②「彼女はこの計画を家の者に話さなかった」のはなぜですか。六十字以内で答えなさい。

問四 傍線部③「もどかしげに」という表現から、道子のどのような感情がわかりますか。説明しなさい。

問五 傍線部④「悲壮な気分」とは具体的にどのような気分ですか。三十文字以内で説明しなさい。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。

「もののはあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふれど、それもさるものにて、今ひとときは心も浮き立つものは、春の気色にこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえ出づるころより、やや春ふかく霞わたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつづきて、心あわたたく散り過ぎぬ、青葉に行くまで、よろづにただ心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそおへれ、なほ、梅の匂ひにぞ、いにしへの事もたちかへり恋しう思い出でらる。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。

「灌仏*1のころ、祭*2のころ、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人恋しさもまされ」と、人のおほせられしこそ、げにさるものなれ。

(注) *1 灌仏：陰暦四月、釈迦生誕を祝い、その像に香水をそそぐ仏事。

2 祭：賀茂神社の祭。陰暦四月に行われた。

問一 二重傍線部AとCを現代仮名づかいに直しなさい。

問二 ①一文目にある波線部で使われている法則を答えなさい。

②また、その法則の効果はどのようなものか説明しなさい。

問三 傍線部a「あはれ」、b「日影」の本文での意味として、適切なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び記号で答えなさい。

四

- a 「あはれ」 ア さみしき イ 趣深き ウ かわいさ エ 無常き
 b 「日影」 ア 日なた イ 木陰 ウ 日の光 エ 木の型

問四 傍線部ア「それもさるものにて」とはどういうことですか。言葉を補って説明しなさい。

問五 本文における筆者の主張はどのようなものですか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 秋や春に変わろうとする時に神仏に仕えるのが尊い時間である。
 イ 花の香りや木々の様子は昔の悩みや恋しさを思い出させる。
 ウ 春に移り変わろうとする時期が最も情趣を感じる時である。
 エ 秋は花なく、春でも花の華やかな色合いに比べると葉の緑は劣る。

問六 この文章は、古典の三大随筆の一つと言われる作品です。筆者が兼好法師である、この文章の作品名を漢字で答えなさい。

次の文章の傍線部について、後の問いに答えなさい。

またその家の美しいのは夜だった。寺町通は①に賑かな通りで——②に賑かな通りで——③と④と澄んでいるが——⑤飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街角になっているので、暗いのは当然であったが、その隣家が寺町通にある家にもかかわらず暗かったのが瞭然⑥しない。しかしその家が暗くなかったら、あんなにも私を誘惑するには至ら⑦なかつたと思う。

(梶井 基次郎「檸檬」より)

問 傍線部①～⑩までの品詞名を後の語群から選び、記号で答えなさい。ただし、動詞については、活用の種類を記号で答えなさい。

(品詞名)

- ア 形容詞 イ 形容動詞 ウ 名詞 エ 代名詞 オ 接続詞 カ 感動詞 キ 副詞 ク 連体詞 ケ 助動詞 コ 助詞
 (活用の種類)

- サ 五段活用 シ 下一段活用 ス 上一段活用 セ サ行変格活用 ソ カ行変格活用